

新聞局

現局長 渡邊 心
前局長 渡邊 心
顧問 加藤 先生

定期考査が3日前に終わり平和な休日をはさんだ次の月曜日、携帯が鳴った。呼び出された場所に行くと、あの4人がいた。

タンタンタタツ。副局長が記事の候補を書き連ねている。すると突然あの声が聞こえてきた。「えー、そうすると訳すとー、おくくく〇〇くん」え!?私は一瞬はつとした。そう、この副局長は、この高校の教師の声マネがめちやくちやうまいのだ。レパートリーは数知れない。

ある日、自治組織の幹部が来て、新聞局恒例のギャグが始まった。「局長。今日何時まで活動するのー?」「朝の4時までー」。一同大笑。「え、そんなにおもしろい...?」爆笑する局員と彼女を尻目に、局長は一人嘆いている。

「♪♪♪♪♪」休日の新聞局はクラシック音楽とともに始まった。余裕組は優雅な時間を過ごし、ギリギリ組に尋ねる。「記事かけた?」「ギリギリ組はうるさそうに返事をした。「まだ書いてない。」お決まりの返事に余裕組は発破をかけた。「早く書いてっ!」

そうこうしているうちに2週間が経ち、無事、新聞が完成した。「それじゃー、始めるぞ。」顧問の掛け声で完成した新聞の最終確認が始まっていった。

新聞の発行を終え、私は感慨にふけていた。それは達成感から来るものなのかもしれない。自分でもよくわからなかった。でも、新聞は嫌いじゃなかった。

私は、第4階段をかけ上がっていった。

